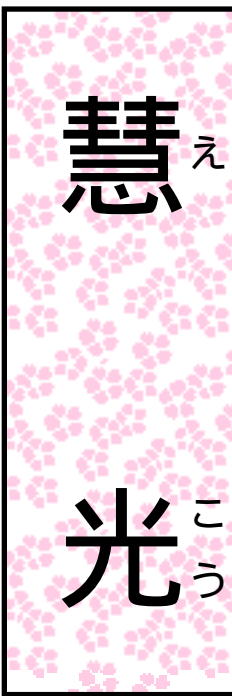




凧ちゃん、武蔵くん、翔くん、橋本家七五三のお参り(5日撮影)



金光寺寺報  
第185号  
発行所 金光寺  
宮崎県西臼杵郡  
五ヶ瀬町大字鞍岡  
5927番地  
0982  
83-2338

今月のことば

くに しんじん  
さとりの国に うまるるは ただ信心に きわまりぬ

今月は親鸞聖人の恩師法然聖人のご功績を讃えられるところです。もともと法然聖人が著された『選択本願念仏集』の「生死の家には疑いをもって所止となし、涅槃の城には信をもって能入となす」のご文によられたもので、私たちが迷いの世界にとどまるのか、あるいは悟りの世界に生まれるかは、ひとえに本願を信ずるか、疑うか、その一事に尽きる意を表し、決断せられるところです。

生と死を繰り返す迷いの世界は「生死の家」と喩えられ、一方で無明煩惱が一切消滅した悟りの領域は「涅槃の城」と示されています。この「生死の家」から「涅槃の城」に至るためには、私たちのさかしらな知識や功德善根の所業をもっては成し遂げられないことであり、阿弥

陀如来が成就された本願の名号を疑いなく聞信するほかはないとされるのです。ですから、もし本願を疑う者あらば、その自力をたのむ執心をひるがえし、如来の「わが名を聞いてわれをたよりとせよ、必ず救う」との仰せを素直に信じ受け入れるべきであると勧められるのです。

私たちが目指すべき世界は「涅槃の城」です。それは人生に破綻し苦悩に沈み、不信感に閉ざされた「生死の家」を出離したところにひらかれる悟りの世界であり、仏の智慧と慈悲によって絶対の信が成就されているところです。そしてその境界は自らの悟りを完成するにとどまらず、ただちにこの世に還来して他者を救うために慈悲のはたらきをなすという世界でもあるのです。(本願寺出版社刊「大乘」誌より転載)

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き、仏事は行いません。ご協力をお願いします。

12月 2日(金) ~ 3日(土) 終終終  
9日(金) 終終終  
15日(木) 終終終  
16日(金) 終終終  
22日(木) 終終終

2017 (平成29)年

1月 20日(金) 終日

2月 7日(火) 終日  
8日(水) 午後

4月 3日(月) ~ 5日(水)

ホームページ開いています。  
URL <http://konkhoji.jp/>  
11月8日現在 アクセス数 78,224人

最近、つらく残念なことがあります。それは夜更かしできなかったという事です。就寝時間は午後十時です。起床はだいたい午前五時。何が残念かと言うと、午後九時から二時間番組(主にサスペンス)を最後まで見ることができないことです。スポーツ番組も時間が延びると最後まで見られません。サスペンスの結果は坊主に聞きます。スポーツ番組の結果は翌朝のテレビでわかります。でも、その時に知りたいです。でも、そんな短い夜の時間を費やして、「どんなに体がいたい人でもベター」と開脚できるようになる「すごい方法」という本の指導のもと、体をやわらかくする運動に取り組んでいます。四週間で達成できる最強プログラムです。今、四週目に入りました。私にはどうも四週間は無理なようです。でも、たしかに効果はあるみたいです。最初に比べるはずいぶん足も開くし、体も両手も床に近くなりました。心配なのは挫折。でも、この欄に書きましたのでやめられないです。(住職 松井卓郎)

仏教用語豆辞典

灯 とう  
明 みょう

沖繩への修学旅行で、戦争遺跡として平和教育の場となっている「糸数豪」へ入りました。当時、千人もの人が避難した巨大洞穴です。

豪の中で懐中電灯を消すと、隣の人はおるか、自分の掌でさえ見えない、まさに真の闇です。その時、案内の人が、小さなロソクを灯しました。その明るいこと、小さな光ですが、千里を照らすようで、闇を破る灯の威力を見せつけられました。仏前に供える灯火を「灯明」といいます。「施灯功德経」は仏への供養こそ、功德は広大であると説きます。また、灯明は迷いの闇を照破する智慧の光とされています。仏典に「灯明とは聖智慧」(大宝積経)。「世の灯火となりて最

勝の福田なり」(無量寿経)とあります。仏法の伝統を「法灯」とそれを伝えることを「伝灯」といいます。「心の灯明」「人生行路の大灯明」と、灯明は大切なものなのです。都会では、真の闇は経験できなくなりましたが、闇が深ければ深いほど、灯火は輝くものですね。(本願寺出版社発行 辻本敬順著 「仏教用語豆辞典」一〇〇 PART 1 から)

住職ひとりごと



# 救いの名のり 南無阿弥陀仏

雨の多い十月が過ぎ去り、十一月に入った途端に寒くなりましたね。祇園山もようやく色づき始めました。寺報がお手元に届く頃には紅葉も見ごろを迎えるのではないのでしょうか。

秋参りを先月十四日から始め、恩講も先月二十九日に最初のお座をとめました。三百十九のご門徒さん宅のお参りの内、今月九日現在百四十七軒を終えることができました。来月四日の恩講のお座を最後に当山報恩講前のそれぞれのお宅、各地区での報恩講がおつとまりになり終わりになります。

今年も命の縁あって当山の報恩講を皆さんと共につとめることができます。ありがたいことです。では報恩講とは何ぞや？

それは、私たちに阿弥陀さまは名号南無阿弥陀仏による救いを完成し、今もはたらき続けてくださいますが、そのおいわれ、おはたらきを生涯をかけて私たちに分かりやすくお示しくくださった宗祖親鸞聖人の恩に報いる法座(講)です。

阿弥陀さまの救いは名号南無阿弥陀仏によるものだと前述しましたが、では名号とは何なのでしょう。

南無阿弥陀仏は阿弥陀さまの名(名号)であります。

そこで、まず名号という言葉の意味について述べたいと思います。「名」も「号」もともに「なのり」ということです。「名」という字ですが、上の方は「タ」、右の方は「タベ」という字で、下は「口」です。つまり、

「タベ」と「口」を合わせた文字で、夕方になって相手が誰かわからなくなると「あなたは誰ですか」と尋ね、私は「です」と名のりますよね。「名」というのは、自分を相手に知らせるためにあります。

夕方のことを「たそがれ」といいますが、もとの意味は「誰そ彼」、彼は誰ですかということとです。早朝のことは「かはたれ」といいますが、「彼は誰」がもとの意味で、同じく彼は誰ですかということとです。

「号」の字も上に「口」が書いてありますが、その文字の意味に「大きな声で叫ぶ」というものがあります。大きな声で私はこういうものだ、あなたの方に対してこういう意味を持った者なのだというこ

とを相手に知らせていくのが「号」です。そうすると、「名」は自分を相手に知らせる

ための名のりであり、「号」はあらゆる人に私はあなたに對してこういう意味を持つものですよと知らしめる名のりということになります。阿弥陀さまはいつでもどこでも私たちに對し、「私は阿弥陀如来、あなたを必ず救うよ、だから私を信じてその身を私に任せ、念仏を申してね」と名のつて下さいます。

その阿弥陀さまのお心、お慈悲を九十年の生涯をかけて私たちのために明らかにし、分かりやすくお示しくくださった宗祖親鸞聖人のご恩に報いる法座、二〇一六(平成二十八)年当山の報恩講に多くの皆さまのご参詣をお待ち申し上げます。

一緒に報恩感謝のお念仏を「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と申しましょう。

# 法語の世界

《原文》  
前々住上人(蓮如)、善従のことを仰せられ候ふ。いまだ野村殿御坊、その沙汰もなきとき神無森をとほり国へ下向のとき、輿よりおりられ候ひて、野村殿の方をさして、このとほりにて仏法がひらけまうすべしと申され候ひし。人々、これは年よりてかやうのことを申され候ふなど申しければ、つひに御坊御建立にて御繁昌候ふ。不思議のことと仰せられ候ひき。また善従は法然の化身なりと、世上に人申しつると、おなじく仰せられ候ひき。かの往生は八月二十五日にて候ふ。  
(蓮如上人御一代記聞書 百九十九)

《現代語訳》  
蓮如上人が善従のことについて、「まだ山科の野村に本願寺を建立するという話もなかったころ、神無森というところを通つて、金森へ帰る途中で、善従は輿から降り、野村の方を指して、この道すじで仏法が栄えるであろう」といつた。つきそつていた人々は、年老いてしまつたからこんなことをいうのだ などとささやいていたのだが、ついにその地に本願寺が建ち、仏法が栄えることとなつた。不思議なことである」と仰せになりました。また上人は、「善従は法然上人の生れ変わりであると、世間の人々はいつている」とも仰せになりました。善従が往生したのは、八月二十五日でした。

二〇一六(平成二十八)年  
金光寺報恩講のお知らせ

日時	内容
十二月十五日	午前十時(日中法要) 上下参り(九区・十三区・十四区地区) 午後七時(速夜法要)(お蕃)
十二月十六日	午前十時(日中法要)(中央参り)(十区・十一区・十二区地区)

講師 北豊教区 京仲組 西徳寺副住職 浄土真宗本願寺派布教使 舟川 智也 師

その他

お参りの際は、門徒式章、念珠と聖典(お経本)をご持参ください。

報恩講期間中の日中法要(午前十時から)の法要にお仕事等でお参りできない方は、十二月十五日午後七時からの速夜法要にお参りください。

報恩講は、親鸞聖人のご命日を縁として、浄土真宗の門信徒が一年に一度手次ぎ寺にそろつて参詣し、阿弥陀さまのみ教えに出遇わさせていただく、**浄土真宗では一番重要な法要・法座です。**是非、ご勝縁をお結びください。